

精神障害を有する患者の理解を促進する授業方法の工夫

－『幻聴妄想かるた』を教材にした学生の体験と学び－

How to improve the understanding of patients with mental health disorders

－Nursing students' experiences and learning from the
“Hallucinations & Delusions Inventory Cards”－

西出 順子

Junko NISHIDE

要旨

〔目的〕『幻聴妄想かるた』を取り入れた演習が、学生にどのように体験されているかを把握し、学習への影響や体験の中で生じている現象について考察し、さらに効果的な授業方法を検討する。

〔研究方法〕『幻聴妄想かるた』を用いた演習後、任意によるアンケート調査を行った。アンケートの質問内容は①『幻聴妄想かるた』を行っている時の感想、『かるた』をして感じたこと、思ったこと、②グループ討議で気づいたこと（精神障がい者に対する理解、援助について、他）、③今回の演習を通しての感想とした。分析は、学生の記述の意味内容が失われないよう精神看護学領域の教員2名で整理・分類した。

〔結果〕『かるた』を行っている時の感想は【学生の感情体験】【現象・対象理解】【作品の印象】に、精神障がい者に対する理解では【精神障がい者に対する理解】【グループメンバーの視点からの気づき】【関わりの姿勢】に、幻覚妄想を有する精神障がい者に対する援助では＜聞く＞＜寄り添う＞＜受けとめる＞＜共感する＞＜否定も肯定もせず、幻聴を深めることは言わない＞＜幻覚・妄想の対応へのとまどい＞に、授業全体を通しての感想では【学びの内容に関する思いや感想】【授業方法に関する感想】に分類した。

〔考察〕『幻聴妄想かるた』を用いた演習は、自由な雰囲気の中で楽しみながらも、幻聴妄想体験の不思議さや、わからなさが探究の動機付けに適切だったこと、そして、学生同士安心して楽しめる場を作り、そこでの討議がイメージの拡充や理解の促進に効果的だったことが示唆された。課題として、共感的な支援につなげるために、学生自身が当事者の体験につながりを感じられるような工夫が必要であることが明らかになった。

キーワード：幻聴妄想かるた 看護学生 精神障がい者 授業方法 患者理解

I. はじめに

臨地実習前の学生の精神障がい者に対する理解の方法として、当事者参加型授業による学習効果^{1) 2)}や、バーチャルハルシネーションを用いた体験型の学習による幻聴体験の理解における効果³⁾が報告されている。実習場における学生の反応として、幻覚・妄想を語る患者に対して「どのように対応していいかわからない。」と戸惑う場面

に多く遭遇する。三原・夢喜田 (2001)⁴⁾ の実習中に学生が困ったと感じた場面を調査したところ、最も多かった“患者から悩みを打ち明けられた”に次いで、“患者の精神症状に遭遇した”がある。学生は初めて患者から語られた病的体験をどのように受けとめていいのか戸惑い、また、なかには患者の体験を受けとめきれず、言葉を返せなかったり、幻覚・妄想体験から注意をそらせようと現実的な話にすりかえることもある。中井 (2007)⁵⁾ は「幻聴や妄想は恐怖が土台にある」と述べており、恐怖が形を変えて表現されていると捉えるなら、共感的に受けとめることはとても重要なケアではないだろうか。「病いの語り」の著者であるアーサー・クラインマン (1996)⁶⁾ は病いの経験についての患者や家族の語りを教育課程において取り入れ、病の経験をどのようにアセスメントするのかを教えることの必要性を述べている。授業では事例を通して病的体験についての説明をしているが、患者の幻覚・妄想体験は個性が強く、意味内容も異なるため紹介できる範囲はごく限られており、精神障がい者のイメージ化を促す枠組みの提供としては十分とは言えない。

臨地実習では、患者が体験している世界に対してひるまずに関心を持ち、イメージを広げ共感的に寄り添える準備をしたうえで実習に臨むことが望まれる。『幻聴妄想かるた』は精神障がい者の共同作業所「ハーモニー」で製作された⁷⁾。『かるた』は作業所のグループで語られた利用者の苦労談を50音別の短文にまとめたもので、多様な病的体験による困りごとが表現されている⁸⁾。この教材を使用し当事者の様々な体験に触れ考える機会を持つことで、臨地実習でいち早く患者の病的体験による困難に対して、共感的に関心を向けたケアに取り掛かれるのではないかと考え演習に取り入れた。本稿では、看護学生が『幻聴妄想かるた』を用いた演習からどのような体験や影響、学びを得たのかを把握し、幻覚妄想体験を有する精神障がい者の理解を育むための効果的な教育方法を検討する。

Ⅱ. 研究目的

幻聴妄想かるたを用いた演習が、学生にどのように体験されているかを把握し、学習への影響や体験の中で生じている現象について考察し、さらに効果的な授業方法を検討する。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

看護系大学3年生75名。2年生次に疾病治療論と精神看護学概論の履修を終え、精神看護援助論を受講中であり、後期に精神看護学実習を控えていた。

2. データ収集期間

2019年6月から2020年3月まで

3. データ収集方法と調査内容

『幻聴妄想かるた』を使用した演習では、『幻聴妄想かるた』作製に関わった当事者のインタビューのDVD45分のうち、当事者自身が幻覚体験を語り研究する場面を5分間視聴した後、『幻聴妄想かるた』を実施し、実施後グループ討議を行った。討議内容はグループ内で話し合いのもと2枚のカードを選択し、これらカード内容から連想されること、意味内容、当事者の体験や苦しさ、学生自身の類似する体験、このような発言をする時どのように対応すると当事者は安心して癒されるのか、等についてであった。

第1回目の調査は演習終了後に実施した。アンケートの内容は①『幻聴妄想かるた』を行っている時の感想、『かるた』をして感じたこと、思ったこと、②グループ討議で気づいたこと（精神障がい者に対する理解、援助につい

て、他)、③今回の演習を通しての感想とした。

第2回目の調査は、『幻聴妄想かるた』を用いた演習の後、臨地実習にどう影響したのかを把握する目的で行った。精神看護実習全体オリエンテーション終了後に調査目的、方法目的、方法（アンケート調査）、アンケートの記入及び提出は任意であること、アンケートは無記名とし、調査の参加・不参加は成績には関係しないことを口頭及び文章で説明した。アンケートの内容は、『幻聴妄想かるた』を用いた演習が、精神看護学実習に影響を「与えた」か「与えていない」か「どちらでもない」かを問い、影響を「与えた」を選択した学生には“演習がいきっている”と思ったことを記述するようにした。

4. 分析方法

1) 『幻聴妄想かるた』授業演習後のアンケート (1) 『幻聴妄想かるた』を行っている時の感想、(2) 精神障がい者に対する理解、(3) 幻覚妄想を有する精神障がい者に対する援助、(4) 授業全体を通じた感想、2) 臨地実習後のアンケート (1) 精神看護学実習に『幻聴妄想かるた』を使用した演習がいきっていると思ったことについて、学生の記述の意味内容が失われないよう精神看護学領域の教員2名で整理・分類した。

IV. 倫理的配慮

『幻聴妄想かるた』を使用した演習とは別日の精神看護援助論の授業終了時に本研究の目的、方法（アンケート調査）、アンケートの記入及び提出は任意であること、アンケートは無記名でありプライバシーは守られること、調査の参加・不参加は成績には一切影響しないことを口頭及び文章で説明した。

アンケートの回収にあたっては、第1回目のアンケートの回収は、教員の視野から外れた教室後部出入口付近に収集ボックスを設置した。第2回目のアンケートの回収は、精神看護学実習の記録提出ボックスとは別のボックスを設け、12月中頃と3月上旬2回に分けて収集し、いずれも個人が特定されないよう配慮した。また、研究参加への同意はアンケートの回収をもって同意とした。

本研究は奈良学園大学倫理委員会の承認を得たうえで実施した。

V. 結果

『幻聴妄想かるた』演習直後のアンケート回収32名(46.6%)、臨地実習後のアンケート回収19名(27.1%)であった。

1. 『幻聴妄想かるた』授業演習後のアンケート (1) 『幻聴妄想かるた』を行っている時の感想、(2) 精神障がい者に対する理解、(3) 幻覚妄想を有する精神障がい者に対する援助、(4) 授業全体を通しての感想、2. 臨地実習後のアンケート (1) 精神看護学実習に『幻聴妄想かるた』を使用した演習がいきっていると思ったこと、の順序で挙げていく。

1. 『幻聴妄想かるた』演習直後のアンケート内容

1) 『かるた』を行っている時の感想(表1)

【学生の感情体験】【現象・対象理解】【作品の印象】のカテゴリに分類し、さらに【学生の感情体験】では<驚き><怖さ><共感できない>のサブカテゴリに分類した。【現象・対象理解】では<幻覚・妄想のイメージ化の促進><幻覚妄想体験の理解><幻覚妄想体験を有する人の理解><当事者の感情体験をイメージする><当事者の近くに身を置く><勝手解釈><対応への困惑>のサブカテゴリに分類した。

(1) 【学生の感情体験】について

＜驚き＞では「自分では思いつきもしなかった幻聴妄想があり、衝撃的でした」「ありえないことを思うんだなって感じた」等の記述があり、また＜怖さ＞では「いろんな種類の妄想があって怖いと思った」「素直に言ってしまうと、なぜそんな考えになったのかわからなくて、少し怖いと思いました」「自分が普段生活している中では絶対に聞くことができないので少し“怖い”と感じました」等の記述があり、初めての体験に遭遇し驚く様子や未知のものに対する恐れを抱く体験をしていた。＜共感できない＞では「“自分の弟が犬に見える”や“床が揺れる”など、そんな風に見えたり、感じたり、本当にするのかな？とちょっと不思議だったし、共感できないところもありました」と学生自身とかけ離れた体験をしていることに対して、受け入れがたい感情を抱く記述があった。

(2) 【現象・対象理解】について

＜幻覚・妄想のイメージ化の促進＞では、「妄想の意味や原因がわからないものもあったが、どんな妄想をしているか知ることができてよかった」「幻聴や妄想というのは精神の授業で聞くことが多かったけど、どんなものかイメージできなかったの、今回の“かるた”をして少しはイメージできました」等の記述があり、＜幻覚妄想体験の理解＞では、「普通の人やったらおかしいと思っていることでも、現実じゃないということが判断できないんだと感じました」「思ってた以上に幻聴や妄想がリアルだなと思った」「皆殺しにされる妄想や家族がニワトリになっていたという妄想体験など、本当にこんな体験しているんだと感じた」と、幻覚妄想という現象や体験そのものに焦点があてられていた。＜幻覚妄想体験を有する人の理解＞では、「また、その人の過去の生活が幻聴妄想に影響しているのではないかと思いました（嫌なことを言われ続けるなど）」「全然、何を言っているかわからなかった。本を見て、その背景を知ること、どういふことやとわかった」と人の背景を推測する記述があり、＜当事者の感情体験をイメージする＞では、「カルタの絵で幻覚や幻聴のしんどさがわかる」「普通に考えたらありえないことだが、このようなことが起こっていると真剣に考えたら、毎日ホラー映画の中にいるようだ」「実際に患者がこんな体験をしていると思うと、混乱するし、とても怖いだろうなと思った」等、当事者の感情体験の理解に関する記述があった。＜当事者の近くに身を置く＞では、「熱が出た時に見る夢のような内容だと思いました」「見ていて面白いと思う反面、自分が実際に同じ状態になったら考えると周囲に理解もされにくいだろうし、つらいだろうなあと感じた」「他人ごとには思えないと思った」等、自分だったらどう感じるかという視点や、自身と近似する体験の記述があった。＜勝手解釈＞では「『コンビニに入ったらお客さん全員が友達だった』は良いやんって思った」と幻覚妄想の理解というよりか自身の価値観で捉える傾向の記述があり、＜対応への困惑＞では「正直怖いと思った。実際に患者さんに言われたら、困っちゃうかもしれない」「幻聴に対し、なんて答えたらいいかわからず、私だったら話が止まってしまう会話が成り立たなそうになるなと思った」と、『かるた』をしながらも援助方法の困難さを感じる記述があった。

(3) 【作品の印象】について

「絵がかわいいものが多かった。小さな子が書いているよう」「いろんな絵柄があって、多数の人たちが作ったんだと感じた。なぜか“わかまつ組”の種類の『かるた』が4枚あったが、すべて絵が異なっていたことが不思議に感じた」と、『かるた』そのものに対する印象の記述があった。

2) 精神障がい者に対する理解 (表2)

【精神障がい者に対する理解】【グループメンバーの視点からの気づき】【関わりの姿勢】のカテゴリに分類し、【精神障がい者に対する理解】は＜幻覚・妄想を有する人のイメージ＞＜当事者の体験について＞＜感情体験を考える

ことの難しさ>のサブカテゴリに分類した。

(1) 【精神障がい者に対する理解】について

<幻覚・妄想を有する人のイメージ>では、「どんなことを思っているかイメージがつかしました」「幻視・幻聴に対し、具体的なことがわかり、なんとなくイメージつけた」「面白い幻聴もあった。人の性格によるのかなと思う」等、複数の当事者からの幻覚妄想体験からイメージがついたという内容の記述があった。<当事者の体験について>では、「私たちからすれば症状である幻聴・妄想も、患者本人にとっては〔本当に起こっていること〕なのだと改めて気づかされた」「実際に起こってなくても、頭や身体で色々感じてしまうんだと思った」等、当事者にとってリアルな体験であることを理解した内容や、「幻聴・妄想があると、とてもつらいと思う」「今までばくぜんとしなかったけど、こんな言葉が聞こえるのはつらいと感じた」等、当事者の感情体験を推測する内容や、「〔実際に体験している人にしかわからない〕という気持ちもあるんじゃないかと思った。バカバカしいとわかっていても仕方ないんだと思った」「無視されることが一番つらいということ」といった本人しかわからないことや、対人関係上の傷つき体験に着目した内容の記述があった。また、いろいろと考えようとする中で<感情体験を考えることの難しさ>という内容もあった。

(2) 【グループメンバーの視点からの気づき】について

「いろんな視点からの話を聞くことで深まったと思う」「一つの幻聴に対して、受け取り側によってはプラスにとらえたり、マイナスにとらえたりすることがわかった」など、グループ討議にてさらに視点が広がったことや、同じ学習材料でも理解の仕方が異なることに着目した記述があった。

(3) 【関わりの姿勢】について

「それぞれみんな思うことがあったりするので、ただただ怖いではなく、患者に寄り添うことが大切だと思った」「ちゃんと受けとめることが必要だと思いました」「その人はその人がそこに至るまでの背景がある。その人の苦痛を感じれるようにしたい」など、援助をする際に必要と思われる姿勢に関する内容の記述があった。

3) 幻覚妄想を有する精神障がい者に対する援助

患者の話を<聞く><寄り添う><受けとめる><共感する><否定も肯定もせず、幻聴を深めることは言わない>など援助者の姿勢の必要性や大切さを記述した内容と、<幻覚・妄想の対応へのとまどい>「難しい。否定も肯定もしないという態度はどんなものかが想像しにくい」「実際に触れあうこともまだなかったからイメージしにくかった」等と、実際の対応を思い浮かべ戸惑う内容の記述があった。

4) 授業全体を通しての感想（表3）

【学びの内容に関する思いや感想】【授業方法に関する感想】のカテゴリに分類し、さらに【学びの内容に関する思いや感想】を<知識が広がったことに対する感想><援助する人としての主体的姿勢><支援方法の難しさ>のサブカテゴリに分類し、【授業方法に関する感想】は<『かるた』を使用した利点><探索欲求の刺激><『かるた』を教材にした感想>のサブカテゴリに分類した。

(1) 【学びの内容に関する思いや感想】について

<知識が広がったことに対する感想>では、「様々な幻聴妄想があり、いろいろなつらい思いをしている人がいることがわかりました」「幻聴の具体性がわかって理解深めた」「想像以上に妄想・幻聴はとても怖いものであるということがわかった」など、幻覚妄想の具体的内容や当事者の思いを理解する内容の記述があった。また、<援助

する人としての主体的姿勢><支援方法の難しさ>では「こんなことが頭の中を支配しているんだとわかりました。しっかり受容して、声かけを実習でうまくできるようにしたい」「想像もできないような妄想があるので、寄り添って理解する必要があると思った」「カルタだけでは、きっとわからないこともあると思うので、実習がんばる」「コミュニケーションにおいて、否定も肯定もせずかつ、現実の世界に戻ってもらうような声かけをするにはどうすればよいか話し合った中で、意見を出し合っているうちに、患者にとっては実際に起こっていることなのに流れてしまっているのか?では、どう返せばいいのか考えるのが難しかった」等、将来援助する者としての有り様や主体的姿勢を示す内容の記述があった。

(2) 【授業方法に関する感想】について

<『かるた』を使用した利点>では、「カルタを利用することで幻覚妄想についてのイメージがしやすくなりました」「患者さんの実際の声が聞けて良かった」「ずば抜けている話が多くて、理解しにくい部分があったけれど、カルタだからこそ楽しくわかれようと思った」「楽しく学べた。絵もついていて、この絵はどういうことかと考えながらできた」「リアルにイメージすることができたので良かった」等があり、意味内容を絵と関連付けて関心を途切れさすことなく考えた内容の記述があった。<探索欲求の刺激>では、「もっといろいろなことをカルタ以外で知りたいと思った」「もっと精神障がい者に対する理解をしたいと思った。DVDとかもっと見たい」と『かるた』で紹介される複数の当事者の生の体験に関心と興味が惹起された内容の記述があった。<『かるた』を教材にした感想>では、「楽しかった」や「イラストがよかった」「面白かった」など、通常の授業とまた違う快の感情に関する記述があった。

2. 臨地実習後のアンケート内容

アンケート回収19名のうち、『幻聴妄想かるた』による「影響を感じた」10名、「わからない」5名、「影響を全く感じなかった」4名であった。以下は「影響を感じた」10名の記述である。

1) 精神看護学実習に『幻聴妄想かるた』を使用した演習がいきいていると思ったことについて

「実際にカルタのような妄想が見られると思って実習を行うことができる」「事前にこんなことが聞こえるのか、見えるのか、『幻聴かるた』を通して驚いていたので、実習の際に受けとめることができた。活かせることができた」「妄想がある患者を受け持たせていただいていたが、カルタの演習をしていたことでイメージが付きやすかった」「患者さんは本当にこんなことが見えているのだろうか」と想像しやすくなった」「始めは『幻聴妄想かるた』の言っている意味が分からなかったが、実習に行ってみて「あのかかるたはこういうことなのか、この人にはあんなふうに見えるのか」と想像しやすかった。カルタをしていたから、とまどうことなく、素直に幻聴・妄想を受け入れられた」等、『かるた』をしていたことで、実習に対するモチベーションを高めたり、心の準備となり、スムーズな受け入れや対応の一助となった内容の記述があった。

VI. 考察

1. 学生の感情体験から

『かるた』を行っている時の感想では、<驚き><怖さ>「不思議で共感できない」等の【学生の感情体験】が述べられていた。「ありえないこと」「思いつきもしなかった」とあるように、自身とはかけ離れた体験に衝撃を受けていたと捉えられる。『幻聴妄想かるた』には、『かるた』を読み上げる音声のはいったDVDがついており、DVDは今から迷宮にでも入っていきそうな不思議な音楽で始まり、故人市原悦子の声でまったりとした恩寵の中

ですすめられる。このことは『かるた』で非日常的な体験をする効果音となり、自身とは少し距離を置いた空間を作ることにもなっている。そのため内容に引き込まれる感じになりつつも、客観的に思考する余地もできると考える。また、『かるた』中は、各グループから笑いや、歓声などがあがり、「楽しかった」という快の感想が聞かれた。精神分析者のビオンは患者とセラピストの作る関係性をコンテイナーとコンテインドという概念で表現し、患者には強烈すぎて自分の中に収めておけない感情をセラピストであるコンテイナーに投げ込み、投げ込んだ感情を分析者に許され憩うことがゆるされたなら、投げ込んだものは修正を受け、患者は安全に再取り入れできる⁹⁾と述べている。このことから幻聴妄想のリアルさを体験し＜驚き＞や＜怖さ＞の感情を抱きながらも、学生同士グループで感情をコンテインし合うことで、インパクトは受けとめられる程度に緩和され则认为る。しかし、グループの醸し出す雰囲気が悪く自由に表現することができなかつたり、自己の感情を表出することにとめらいつある学生であれば、不快な感情を留めたまま演習を終えることもありうる。解消されなかつた不快な感情は怒りや嫌悪に変わり、不快を生じさせた対象とは偏見という形で自己と切り離し、不快な感情から自身を守ることにもなりかねない。教員はグループの動きをよく見て、感情を表出し合える環境かどうかを観察し、グループもしくは学生個人をケアすることが大切となる。

効果的な学習としては、『かるた』で生じた楽しさ、驚き、怖さという感情は、グループでコンテインされ程よい興奮という情動を伴い、脳ではドーパミンが放出されている状態であり生物学的に学習を促進する¹⁰⁾環境が整ったと言える。また、認知神経科学者の乾（2018）¹¹⁾は「やる気のある時は繰り返し学習を行わなくても、一回で学習することが可能である」と述べているように、これらの感情が動因となり、グループ討議中も『かるた』の絵や付録の背景を解説する冊子に目を通すことで関心ややる気を継続させることになり、学習効果は高められたと考える。

2. 患者理解について

『かるた』を行っている時の感想の中に【現象・対象理解】があり、＜幻覚・妄想のイメージ化の促進＞＜幻覚妄想体験の理解＞＜幻覚妄想体験を有する人の理解＞＜当事者の感情体験をイメージする＞に関する記述があった。＜幻覚・妄想のイメージ化の促進＞＜幻覚妄想体験の理解＞は幻覚・妄想という症状や現象のイメージ化や患者にとってはリアルな体験であること、自分ではどうしてもできない症状の理解に関する内容があり、先の＜驚き＞や＜怖さ＞という感情に呑み込まれるのではなく現象を理解しようとしていたことがわかる。＜幻覚妄想体験を有する人の理解＞＜当事者の感情体験をイメージする＞については、症状を有する人を意識した理解になっており、幻覚妄想体験の背景について思いを巡らせたり、体験を共感的に捉えようとしていた。また、精神障がい者の理解についての記述では、数は少ないが、人ではなく幻覚妄想体験のイメージの拡大で終わっている記述もみられた。幻聴妄想のイメージや理解で終わってしまうと、他人事で終わり、共感的な理解につながらない可能性があり、そればかりか最悪な事態として、理解できない者という偏見にもなりかねないと考える。一方、＜当事者の近くに身を置く＞では、「熱が出たときにみる夢のようだ」と自分に近い体験を連想したり、「もし自分であれば」と当事者意識をもって理解しようとする記述もあった。当事者の中に自己と似通ったところを見つけることによってつながりを感じ、理解不能な他者から理解可能な対象へと変わり共感的理解へと発展していくことが考えられる。精神分析学者である富樫（2018）¹²⁾は治療者の当事者性の重要性を指摘し「偶然の出会いにおける治療者の当事者性がそのフィールドに浮かび上がる限り倫理的である」と述べており、当事者性は偏見への移行を阻止するうえでも重要な鍵となりうる。

授業の目的は、幻覚妄想を有する人の苦悩や生きづらさを共感的に理解し、ためらいを最小限にして支援する姿勢の基盤を作ることを目的としているので、現象の理解で終わるのではなく、人の理解まで導くことが肝要となる。共感的理解まではいなくても、同じ人として何かつながりをもてる体験にまで導くにはどうしたらいいだろうか。学生の記述「熱が出たときにみる夢のようだ」からヒントをもらうと、精神分析では夢を治療材料として用い夢に象徴される内容を解釈していくことがある。河合（1967）¹³⁾は著書ユング心理学入門で「心象と象徴」について述べ、解説の中で幻影や幻覚とは区別をしているが、象徴が人の古来より持つイメージとつながっているとすれば、学生が夢とのつながりを感じたように活用できる概念であると考ええる。例えば『かるた』の演習前に、連想ゲームで『幻聴妄想かるた』の絵から浮かぶイメージを自由に出し合い連想を広げていく中で、幻聴妄想に似た印象を抱くことも不可能ではないと思われる。

3. 『幻聴妄想かるた』を用いた学習方法について

感想の中に「幻聴妄想を実際に絵で見れて、相手を知ることができるのでよかった」「絵もついていて、この絵はどういうことかと考えながらできた」「リアルにイメージすることができたのでよかった」等、『かるた』の絵に関する内容のものが複数あった。『かるたの絵』は当事者の作品であり、きれいに整っていないところがリアルさを強調し迫ってくるものを感じさせる。また絵をみると「どういうこと？」と探索欲求を掻き立てられ理解しようとする。古藤（2000）¹⁴⁾は、やる気の心理構造として、①要求、②動因、③誘因、④強化と順序だてて説明しており「人間は、新奇なものに魅了され、複雑なものや困難なものに対して追究心を燃やし、矛盾の克服と葛藤を通じて興味と関心を高めながら、動機を強めていくものである」と述べている。古藤の①から④の観点から『かるた』の演習を当てはめて考えると①は幻聴妄想を理解したいという欲求があてはまり、②の動因は、『幻聴妄想かるた』がもつ新奇性や複雑性、わかりたいのにわからない等の葛藤は素材として十分であると言える。③の誘因では、「これならやれる」という感覚をもつことが大事であり、『かるた』後の学生同士のディスカッションがこれにあたる。ディスカッションでは「人によっていろんな理解の仕方がある」や「いろんな視点からの話を聞くことで深まったと思う」とあり、相互に理解を深める体験を得たうえでの満足感を少なからず得ていたようにとれる。④強化については別演習の当事者からの語りを聞くことや、臨地実習による体験がこれにあたりと捉えられ、『かるた』での学びは、①②③までの過程を踏み重ねていると考えられる。

中村・川野（2002）¹⁵⁾は「精神障がい者に対する態度は必ずしも直截的な接触によって肯定的に変容するわけでもなく、むしろ間接的な精神障がい者に対する接触思考や関心の高さが拒否的な態度の軽減につながる」と述べている。臨地実習等の直接的な接触はコミュニケーションの困難さ¹⁶⁾などの不安や緊張が生じやすく、理解にまで至りにくい場合があると考ええる。その点、『幻聴妄想かるた』を用いた演習では、楽しくリラックスした雰囲気の中で自由にイメージを広げ理解を促進させる側面があると考ええる。実習後の感想では「イメージが付きやすかった」「想像しやすかった」と演習が心の準備の役割を果たしたことがわかる内容の記述と「あの『かるた』はこういうことなのか、この人にはあんなふうに見えるのか」と受け入れのスムーズさだけでなく、帰納的に思考しており、これは先の古藤の④強化にあたる体験と考える。

VII. おわりに

今回データとなるアンケートの回収率が演習直後でも回収率50%をきっていた。理由としては、90分の演習の中でコミュニケーション演習と抱き合わせでスケジュールを組み、実質45分の演習であった。特に前半のグループに

関しては、次の演習に向かうために急がなければならない状況があり、回収率が悪かったと考える。また、臨地実習後の回収率が極めて悪い理由として、実習中に顕著な幻覚や妄想をもつ患者を受け持たなかったことや、過密な実習スケジュールの中でアンケートまで気持ちが回らなかった等が考えられる。提出も授業に対する一つのポジティブな感想の意思表示だとするなら、提出しなかった学生の中には、ネガティブな印象や不満足な感想を持っていた者もいたと考えることが妥当と思われる。

限られた中での感想であったが、『幻聴妄想かるた』を用いた演習は、自由な雰囲気の中で楽しみながらも、幻聴妄想体験の不思議さや、わからなさが探究の動機付けに適切だったこと、そして、学生同士安心して楽しめる場を作り、そこでの討議がイメージの拡充や理解の促進に効果的だったことが示唆された。課題として、共感的な支援につなげるために、学生自身が当事者に近い体験ができるような工夫が必要であることが明確になった。

謝辞

データ分類・整理にご協力して下さった大手前大学国際看護学部 西本美和先生に心より感謝いたします。

文献

- 1) 伊礼優, 鈴木啓子, 金城祥教「精神の病を抱える当事者の授業参加による学習効果 学生レポートの内容分析を通して」『日本看護学会論文集 看護教育』41 2011 119-122
- 2) 船越明子, 田中敦子, 服部希恵, 松田陽子「当事者参加型授業を含む複数の教材を用いた教育的介入が看護学生の精神障がい者への対象理解に与える影響」『三重県立看護大学紀要』13 2009 29-35
- 3) 川村みどり, 武政菜保子, 谷本千恵, 清末郁恵「看護学生に日本版バーチャルハルシネーションを用いた体験学習による統合失調症患者への印象の変化」『石川看護雑誌』7 2010 35-44
- 4) 三原亜矢巳, 多喜田恵子「学生が困った場面を振り返ることの学習効果 精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析より」『名古屋市立大学看護学部紀要』1 2001 63-70
- 5) 中井久夫『こんなとき私はどうしてきたか』医学書院 2007
- 6) アーサー・クラインマン『病いの語り 慢性の病をめぐる臨床人類学』誠信書房 1996
- 7) 新澤克憲, 藤田貴士「『幻聴妄想かるた』のつくり方」『精神看護』5 医学書院 2009
- 8) ハーモニ－（就労継続支援B型事業所）『「幻聴妄想かるた」解説冊子』医学書院 2011
- 9) 松木邦弘『精神分析体験：ビオンの宇宙』岩崎学術出版社 2009
- 10) 乾敏郎『感情とはそもそも何なのか－現代科学で読み解く感情の仕組みと障害－』ミネルヴァ書房 2018
- 11) 同上
- 12) 富樫公一『精神分析が生まれるところ 間主観性理論が導く出会いの原点』岩崎学術出版社 2018
- 13) 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 1967
- 14) 古藤泰弘『授業の方法と心理』学文社 2000
- 15) 中村真, 川野健治「精神障害者に対する偏見に関する研究－女子大学生を対象にした実態調査をもとに－」『川村学園女子大学研究紀要』13 2002 137-149
- 16) 矢野優, 田中千絵, 三品弘司「精神障がい者の学内演習参画が看護学生に及ぼす影響 実習前のイメージと実習中のかかわりの変化」『日本精神科看護学術集会誌』57(2) 2014 83-87

表1 『かるた』を行っている時の感想

カテゴリ	サブカテゴリ	主な内容（抜粋）
学生の感情体験	驚き	自分では思いつきもしなかった幻聴妄想があり、衝撃的でした
		妄想にも、怖いような感じの妄想から楽観的な妄想があり驚きました
		ありえないことを思うんだなって感じた
	怖さ	いろんな種類の妄想があって怖いと思った
		素直に言ってしまうと、なぜそんな考えになったのか、などが分からなくて、少し怖いと思いました
		自分が普段生活している中では絶対に聞くことができないので少し「怖い」と感じました
共感できない	正直怖いと思った。実際に患者さんに言われたら、困っちゃうかもしれない	
現象・対象理解	幻覚・妄想のイメージ化の促進	“自分の弟が犬に見える”や“床が揺れる”など、そんな風に見えたり、感じたり、本当にするのか？とちょっと不思議だったし、共感できないところもありました
		妄想の意味や原因がわからないものもあったが、どんな妄想をしているか知ることができてよかった
		幻聴や妄想というのは精神の授業で聞くことが多かったけど、どんなものかイメージできなかったの、今回のかるたをして少しはイメージできました
		妄想が楽しく良いものもあるが、怖いもの、危ないものもあり、幻聴妄想がどういうものか知れてよかった
	幻覚妄想体験の理解	妄想のイメージは、怖いイメージしかなかったけれど、イメージが変わりました
		普通の人やったらおかしいと思っていることでも現実じゃないということが判断できないんだと感じました
		思ってた以上に幻聴や妄想がリアルだなと思った
	幻覚妄想体験を有する人の理解	皆殺しにされる妄想や家族がニワトリになっていたという妄想体験など、本当にこんな体験しているんだと感じた
		また、その人の過去の生活が幻聴妄想に影響しているのではないかと思います（嫌なことを言われ続けるなど）
	当事者の感情体験をイメージする	全然、何を言っているかわからなかった。本を見て、その背景を知ることで、どういうことかやっとわかった
		カルタの絵で幻覚や幻聴のしんどさがわかる
		内容が無茶苦茶で、こんなことがいつも思うのは疲れるなどと思いました
		普通に考えたらありえないことだが、このようなことが起こっていると真剣に考えたら、毎日ホラー映画の中にいるようだ
	当事者の近くに身を置く	カルタを聞いて理解できることもあれば、理解できないこともあった。実際に患者がこんな体験をしていると思うと、混乱するし、とても怖いだろうなと思った
		熱が出た時に見る夢のような内容だと思いました
		見ていて面白いと思う反面、自分が実際に同じ状態になったら考えると周囲に理解もされにくいだろうし、つらいだろうなあと感じた
勝手解釈	他人ごとには思えないと思った	
対応への困惑	「コンビニに入ったらお客さん全員が友達だった」は良いやんって思った	
	正直怖いと思った。実際に患者さんに言われたら、困っちゃうかもしれない	
	幻聴に対し、なんて答えたらいいかわからず、私だったら話が止まってしまう会話が成り立たなそうになるなと思った	
作品（カルタ）の印象	絵がかわいいものが多かった。小さな子が書いているよう	
	いろんな絵柄があって、多数の人たちが作ったんだと感じた。なぜか「わかまつ組」の種のかるたが4枚あったが、すべて絵が異なっていたことが不思議に感じた	

表2 精神障がい者に対する理解

カテゴリ	サブカテゴリ	主な内容（抜粋）
精神障がい者に対する理解	幻覚・妄想を有する人のイメージ	どんなことを思っているかイメージがつかしました
		幻視・幻聴に対し、具体的なことがわかり、なんとなくイメージつけた
		深まった。どういう体験（妄想・幻聴）をしているのかを知れた
		面白い幻聴もあった。人の性格によるのかなと思う
	当事者の体験について	私たちからすれば症状である幻聴・妄想も、患者本人にとっては「本当に起こっていること」なのだと改めて気づかされた
		実際に起こってなくても、頭や身体で色々感じてしまうんだと思った
		幻聴・妄想があると、とてもつらいと思う
		今までばくぜんとしかなかったけど、こんな言葉が聞こえるのはつらいと感じた
		「実際に体験している人にしかわからない」という気持ちもあるんじゃないかと思った。バカバカしいとわかっていても仕方ないんだと思った
		無視されることが一番つらいということ
	感情体験を考えることの難しさ	幻覚妄想の人の感情体験について考察することが難しかった
グループメンバーの視点からの気づき		人によっていろんな理解の仕方がある
		いろんな視点からの話を聞くことで深まったと思う
		みんないろんなイメージを持っていることがわかりました
		一つの幻聴に対して、受け取り側によってはプラスにとらえたり、マイナスにとらえたりすることがわかった
関わりの姿勢		それぞれみんな思うことがあったりするので、ただただ怖いではなく、患者に寄り添うことが大切だと思った
		ちゃんと受けとめることが必要だと思いました
		その人はその人がそこに至るまでの背景がある。その人の苦痛を感じれるようにしたい

表3 授業全体を通しての感想

カテゴリ	サブカテゴリ	主な内容（抜粋）
学びの内容に関する思いや感想	知識が広がったことに関する感想	様々な幻聴妄想があり、いろいろなつらい思いをしている人がいることがわかりました
		具体的に幻聴について知れたので良かったです
		幻聴・妄想といわれてもピンと来なかったので、今まで以上に患者さんのつらさを理解でき、寄り添えるようになったのではと感じた
		想像以上に妄想・幻聴はとても怖いものであるということがわかった
	援助する人としての主体的姿勢	患者には本当に起こっていることなのだと、受け入れなければならないと思いました
		こんなことが頭の中を支配しているんだなとわかりました。しっかり受容して、声かけを実習でうまくできるようにしたい
		幻聴が聞こえている人に対してどのように援助しようか考えることができたと思う
		想像もできないような妄想があるので、寄り添って理解する必要があると思った
	支援方法の難しさ	カルタだけでは、きっとわからないこともあると思うので、実習がんばる
		コミュニケーションにおいて、否定も肯定もせずかつ、現実の世界に戻ってもらうような声かけをするにはどうすればよいか話し合った中で、意見を出し合っているうちに、患者にとっては実際に起こっていることなのに流れてしまっているのか？では、どう返せばいいのか考えるのが難しかった

授業方法に関する感想	『かるた』を使用した利点	カルタを利用することで幻覚妄想についてのイメージがしやすくなりました
		患者さんの実際の声が聞けて良かった
		幻聴妄想を実際に絵で見れて、相手を知ることができるので良かった
		ずば抜けている話が多くて、理解しにくい部分があったけれど、カルタだからこそ楽しくわかれようと思った
		実際にカルタをして、こういうことが起きているということを知ることができたので良かったです
		楽しく学べた。絵もついていて、この絵はどういうことかと考えながらできた
		リアルにイメージすることができたので良かった
	探索欲求の刺激	もっといろいろなことをカルタ以外でお知りしたいと思った
		もっと精神障がい者に対する理解をしたいと思った。DVDとかもっと見たい
	『かるた』を教材にした感想	楽しかったです
		イラストがよかった
		面白かった